

CAG室を担う看護婦の当院における現状と展望

田岡奈々

庄内余目病院 看護婦

【背景】当院では開設当初、CAG室を外来看護婦が担っていた。しかし、平成9年に循環器科単独病棟となり病院組織の諸事情により病棟看護婦がCAG室を担いはじめた。体制変更後5年が経過しており、病棟看護婦がCAG室を担うべきか振り返り検討した。

【現状】外来看護婦がCAG室を担っていた当時は、治療方針の継続や患者との意志疎通の面で不十分であったと思われる。病棟看護婦がCAG室を担う事による利点として、1. 医師と看護婦が患者の情報を容易に共有できる。2. 患者の不安が軽減できる。3. 患者の全体像が把握出来る。等があげられた。しかし、欠点として、CAG室業務に対してのエキスパート看護婦がないことがあげられる。そのため、特定の病棟看護婦がCAG室業務を専門に行い、早急な知識、技術の習得に努めているところである。

【まとめ】病棟看護婦がCAG室を担うことで、患者の状態や医師の治療方針等の情報を他科メディカルスタッフへフィードバックすることが容易となった。しかし、エキスパート看護婦の育成に問題が残る。今後、病棟看護婦がCAG室を担っていくためには、CAG室業務、教育体制の再構築が必要であると考えられた。